長野工業高等専門学校紀要第 53 号(2019)　1-10

釈論大江千里集（四）

小池博明
半沢幹一

【前説】

古今集以前に成立したと見られる『大江千里集』（別名『句題和歌』）は、大江千里一人によって詠まれ編まれた、漢詩一句を歌題とした、日本最初の和歌集である。この歌集は句題という形式をとることから、その試みとしての文学史的な評価は唱えられるものの、歌そのものは句題を直訳しただけの、生硬稚拙なものという低い評価がされてきた。

本稿は、そのような画一的な評価を疑問とし、改めて句題と和歌との関係や和歌の表現史的位置づけを一組ずつ検討することを通して、正当な評価を行うために、新たな注釈を施すものである。

「正当」ということばの意味は二つある。一つは、歌単独として見たとき、当時の評価基準に照らして、出来の如何に違いのあることを明らかにするということであり、もう一つは、句題あっての歌であるから、両者の関係の如何を見極めることが、本集の趣旨を考えるうえで、もっとも重要なことであるということである。

なお、本注釈の目的と意義の詳細、および先行研究の整理や注釈の凡例などは、旧稿の「釈論大江千里集(一)」を参照されたい。今回は11から13を取り上げる。

落尽閑華不見人(落尽する閑花は人を見ず)

11　あとたえてしづけき山にさく花のちりはつるまでみる人もなし

【通釈】

人の訪れがなくて、静かな山に咲く（春の）花が（すべて）散り終わるまで、（その花を見る人（は誰）もいない。

【語釈】

あとたえて　「あとたえて」は、跡つまり人跡が絶えての意であり、「しら山に雪ふりぬればあとたえて今はこしぢに人もかよはず」（後撰集・八・冬・四七〇）のように、それまであった人の往来が途絶えるという意味と、「あとたえてとふひともなき山ざとにわれのみみよとさけるうのはな」（後拾遺集・三・夏・藤原通宗・一七二）のように、もともと往来がないという意味とがある。後撰集の例のように、「雪」と組み合わされることが多く、その場合は、積雪によって往来ができなくなることであるが、当歌は、後者の意味であろう。それは、直接、往来を阻害する要因が示されていないという点、そして、「とふ人もあらじと思ひし山ざとに花のたよりに人め見るかな」（拾遺集・一・春・五一・清原元輔）のように、普段は人が来ない所にも、花が咲く時期だけは花見にやってくる人がいると詠まれることがあるという点による。ただし、当歌では、そういう時期にさえ訪れる人がないことを詠むという点で、異色である。なお、表現上、「あとたえて」は続く「しづけき」と並列あるいは修飾の関係を成すと捉えるのが自然ではあるが、留意したいのは、挙例の「人もかよはず」であれ「とふひともなき」であれ、「あとたえて」の後には、同じ事態を表わす表現が来て、一種の反復表現になっていることである。当歌でもそれに相当するのは、結句の「人もなし」である。

しづけき山に　「しづけし」については、本集三番歌【語釈】「しづかなる」の項を参照。句題の「閑華」の「閑」に対応する措辞と見られるが、句題では「華」がその形容の対象であるのが明らかであるのに対して、当歌では直続の「山」を修飾しているともとれるし、「山にさく」とともに「花」を連体修飾するととれなくもない。句題との対応を考えれば、後者のほうが適切であるものの、和歌として句の分節を重視すれば、「しづけき山に」で切れるので、「山」の形容ととるのが穏当であろう。ただし、「しづけし」という語が「山」であれ「花」であれ、形容す

る例は見当たらない。どちらもそれ自体としては静かなものであるから、その形容はそもそも不要である。あえて用いるとすれば、それ以外の理由によって静かではなくなることを前提とする場合で、当歌におけるその前提は、人の訪れである。つまり、「しづけき」という形容は、初句の「あとたえて」、結句の「人もなし」から知られるように、人の訪れがまったくない状態を表わしているということである。他諸本および赤人集で「山」が「やど」になっているのも、「しづけき」が他人の不在を示す場としてのふさわしさによるものであろう。

さく花の　格助詞「の」は連体格ではなく主格を表わす。ただし、文末終止と呼応することはないので、結び付く述語動詞としては、第四句の「ちりはつ」か、結句の「見る」のどちらか、あるいはどちらともみなしうる。「ちりはつ」のほうは意味的に「さく花」となじみやすいが、句題との関係からは「見る」との結び付きのほうが優先されよう。ただし、類例を見るかぎりでは、「あしひきの山さへ光り咲く花の散りぬるごとき(咲花乃散去如寸)我が大君かも」(万葉集・三・四七七・大伴家持)、「今のごと心を常に思へらばまづ咲く花の地に落ちめやも(先咲花乃地尓将落八方)」(万葉集・八・一六五三・県犬養娘子)、「さくはなのちりにしはるはうけれども今日のわかれはなほぞかなしき」(重之集・七一)などのように、「さく花の」は「散る」や「落つ」の主格となることが多い。

ちりはつるまで　「ちりはつ」は、散り終わること、すべてが散ることを意味する。植物についてならば、そのすべての花あるいは葉が散ることをいう。この句は当歌以外に、鎌倉時代までに四例ほどの用例しか見えない。「のこりなきいのちををしと思ふかなやどの秋はぎちりはつるまで」(後拾遺集・四・秋上・二九四・源心)、「新院位におはしましし時、牡丹をよませ給けるによみ侍りける／さきしよりちりはつるまでみしほどにはなのもとにてはつかへにけり」(詞花集・一・春・四八・藤原忠通)、「と山なるまさきのかづら冬かけてちりはつるまでふる時雨かな」(文保百首・三三五五・昭訓門院春日)、「かぞふればけふは廿日に成りにけり山たち花の散りはつるまで」(百首歌　建長八年・六五九・衣笠家良)の四例であり、萩・牡丹・柾葛・山橘という植物の花あるいは葉に関して用いられている。このうち、詞花集の例のように「さきしよりちりはつるまで」と開始の期間が明示される場合もあるが、「ちりはつるまで」だけでも、咲き始めからの一定期間が想定されている。一定期間とは、花ならば、一木一輪の咲いて散るまでという短い間ではなく、その季節の花々の咲き始めから散り終わるまでということである。春の花々が「ちりはつ」ことを詠む歌に、「花はみな散りはてぬめり春ふかきふぢだにちるないましばしみん」(和泉式部集・二〇)、「はるのくれぬることをいふに、おなじ人／春ともにゆくふなぢにも思ふかな都の花は散りはてぬらん」(公任集・四三五)などがある(公任集の「花」を桜とする注釈もあるが、詞書「はるのくれぬること」から、春の花とすべきである)。ここまでの表現は、結句を修飾するが、その意味関係の可能性としては二通りが考えられる。一つは、「見る人もなし」という句全体の表わす事態が咲き始めから散り終わるまで続いたということ、もう一つは、「見る」のみを修飾して、最初から最後まで見続ける、つまりその間ずっとそこに居続ける人がいなかったということである。初句の「あとたえて」との関係を考えれば、前者のほうが適切であろう。

みる人もなし　用例はさほど多くはないが、結句の類型として認められる。「わが心かくさじばやとおもへども見る人もなしする人もなし」(拾玉集・二〇五八)のように、「する人もなし」と並列する以外は、「うちむれしこまもおとせぬ秋ののはくさかれゆけどみる人もなし」(後拾遺集・十九・雑五・一一三二・源兼長)、「むめの花さきてかひなきおきつなみたちよりてだにみる人もなし」(躬恒集・一七一)、「我がためになるるをみればすてごろもしほたれたりと見る人もなし」(一条摂御集・三六)、「小倉山もみぢふり敷く谷かげのあとなき庭はみる人もなし」(夫木和歌抄・三十・雑・一四四八一・藤原為家)などと、結句に見られる。これらの例から確認しておきたいのは、「人」はすべて「みる」の対象ではなく主体であるという点である。なお、この句は、他諸本に「みる人ぞなき」とあり、「ぞ」によって「みる人」が特定・強調されている。それに対して、底本の「も」は包括的な暗示性による詠嘆を帯びる。

【補注】

当歌は、構文においても内容においても、平安時代の他の歌と比較すると、特異である。

構文としては、「さく花」が第三句に位置する歌を例にすると、**【語釈】**「さく花の」の項の例に挙げたように、「の」が下接する場合もなくはないが、多くは、「かすみたつみむろのやまにさくはなはひとしれずこそちりぬべらなれ」(好忠集・百首歌・たつみ・五七八)、「のべをおきてきしのほとりにさくはなはたちよるなみのかずをみむとか」(三条院左大臣殿前栽歌合・一四・在原英材)、「しらゆきのつもるこずゑにさく花はまだふるとしのはるにざりける」(定頼集・三)などのように、「は」を下接して、下句に対する主題として提示される。これは、それぞれ限

定された状況にある上句の「さく花」を主題として、それを見立てなどにより機知的に下句に解説してみせるという、典型的な古今集的構文となる。

これらに対して、当歌は、「さく花」に格助詞「の」が下接するため、上句は主題とならず、連続的にすべて結句を修飾することになり、結句の「人」が「も」を下接して当歌の主題となっているのである。その点において、『全釈』の【訳】で、「訪ねるひとがいなくなって、しずかな山に咲く花は、散り果てるまで見る人がいないことだよ。」としているのは、古今集的構文にひきずられたものだろう。

内容としては、花が咲くことと人の訪れとの関係に関して、当時の歌においては、たとえば、花の時期だけは人が山里に来る（「とふ人もあらじと思ひし山ざとに花のたよりに人め見るかな」拾遺集・一・春・五一・清原元輔）、誰も見ないなら私だけが賞美しよう（「山たかみ人もすさめぬさくら花いたくなわびそ我見はやさむ」古今集・一・春上・五〇）、花にしてみれば咲いた甲斐がない（「むめの花さきてかひなきおきつなみたちよりてだにみる人もなし」躬恒集・一七一）などのように詠まれるのが一般的である。

ところが、当歌はこのどれにも与しない。花が咲いている間、一人の訪れもないことについて、その状況そのものをほぼそのとおりに表現している。結句の「人もなし」からは、その状況に対する驚きの念が感じられなくもないものの、「わがやどの花見がてらにくる人はちりなむのちぞこひしかるべき」（古今集・一・春上・六七・凡河内躬恒）のような感傷までは伴っていない。

つまり、当歌は、花が咲いてすら人の訪れがないことに関する感慨なり機知なりを歌うものではなく、その状況をとおして自らの閑居の様相を描いたものであるといえる。春の花の時期は、咲くにせよ散るにせよ、人々の心を騒がせずにはおかない。花の時期だけは、普段は来ない人々が訪れて、心落着かなくなりがちである。しかし、そういう時期でさえ、誰もいないということは、いかに静かな生活を送ることができているかということをおのずと示すことになろう。

ちなみに、原拠詩の題が「晩春」であるにもかかわらず、当句題を収録した千載佳句でも新撰朗詠集でも、「閑居」に部類されているのであって、そのことは、千里の当歌の詠み具合も含めて、この句の、当時の日本での享受のされ方を示していよう。

なお、赤人集には、「あとたえてしづけきやどにさくらばなちりはつるまでみるひともなし」（一九）として載る。「山」が「やど」に、「ちる花の」が「さくらばな」に代わっていて、このほうが当時としてはなじみやすい、古今集的な詠みぶりと言えよう。

【比較対照】

原拠詩は、次の、元稹の七言絶句「晩春」（元氏長慶集・巻十六）であり、当句題はその結句から採られた。この句は転句とともに、千載佳句（閑居・四五一）や新撰朗詠集（閑居・五七五）にも採られている。

昼静簾疏燕語頻　　昼静かに、簾疏（あら）くして、燕の語ること頻（しき）りなり、
雙雙鬥雀動階塵　　雙雙の鬥（たたか）ふ雀は階（きざはし）の塵を動かす。
柴扉日暮随風掩　　柴扉（さいひ）は日暮れて風に随つて掩（おほ）ひ、
落尽閒花不見人　　落尽する閒花は人を見ず。

原拠詩は、順に、さえずる燕、喧嘩する雀、風が閉める柴扉、落ち尽くす花を取り上げることによって、結果として家居してただ一人静かに過ごすさまが示される。その季節は、タイトルの「晩春」から知れるが、詠まれた素材のそれぞれから積極的には特定されない。つまり、たまたま「晩春」なのか、「晩春」だからなのか、という問題である。

本集において、結句が句題に採られること自体は珍しくない。判明している白氏文集の原拠詩二三編のうち結句から採られたのが九例あって、もっとも多い。ただ、前後関係は不明であるが、転句は、本集七〇番歌の句題に採られているし、起句の「燕」も承句の「雀」も歌材として取り上げられることがほとんどなく、結果として結句のみが残ることになる。それほどまでに、この詩に執着があったということかもしれない。

結句において注目したいのは、この句の主語は、他の句との関係および語順から見て、「人」ではなく「閒花」であるという点である。擬人的な表現ということになるが、それは程度の差はあれ、他の句にも認められることであって、結句だけが特別というわけではない。花が人を見ないというのは、逆の関係もまた成り立つのであり、花を見る人がいないということである。

句題と当歌との対応関係という点では、句題に用いられた語のすべてが当歌に活かされている。ただし、それらの関係付けが異なり、その最たるものが、「見る」ことの主体と対象との逆転である。これは、【語釈】「みる人もなし」の項で触れたように、和歌としての類型にならったものであって、事態が同じであれば、その逆転に特別な意図があったとは考えられない。

細かな異なりとしては、句題の「落尽」はまさにその状態の花を表わすのに対して、当歌では「ちりはつるまで」のように、咲いてからの時間的な推移を示す表現になっている。また、「閒花（閑華）」の「閒（閑）」に相当する「しづけき」が「花」ではなく「山」単独にかかるような並びになっている。作歌にあたり、「山」が閑居感をより強く出すために補われたとすれば、「しづけき」が「山」と「花」のどちらにかかるにせよ、大した違いはなかったと見られる。

他に、句題にない語が当歌において補われたのは、初句の「あとたえて」である。【語釈】当該項で述べたように、往来がないということは、つまり人がいないことであるから、同じ事態を言い換えたものである。初句と結句における、その反復は、一人であること、つまり閑居を強調するためであろう。

老眼花前暗（老眼、花前に暗し）

12　としふかくおいぬる人のかなしきはさけるはなさへおとるなりけり

【通釈】

年をひどくとって老いた人が悲しいのは、咲いた花までも（その眼では若い頃に比べ）見劣りすることだなぁ。

【語釈】

としふかく　「ふか（深）し」が時間に関して用いられる場合には、多く経過するの意を表す。この用法は、「おしてる　難波の菅の　ねもころに　君が聞こして　年深く（年深）　長くし言へば…」（万葉集・四・六一九・大伴坂上郎女）、「磯の上のつままを見れば根を延へて年深からし（年深有之）神さびにけり」（万葉集・十九・四一五九・大伴家持）など、万葉集から見られる。「年深」の訓読語との指摘もある（新全集・新大系）が、空間を表す形容詞独自の派生と捉えても、問題あるまい。平安時代では、「年深く」は初句に置かれて、「年深くふりつむ雪を見る時ぞこしのしらねにすむ心ちする」（後撰集・八・冬・四九九）、「としふかくねざしいりえのまつなればおいのつもりはなみやしるらん」（忠岑集・九〇）のように、「深く」は「年」の述語となるとともに、次の語（挙例では、後撰集は「ふりつむ」、忠岑集は「ねざし」）の連用修飾語となる、鎖型構文を構成することが多い。特に「雪」を詠むものに目立つ。当歌の「ふかく」は、「とし」の述語でもあり、かつ「おいぬる」を修飾するとも見られるが、「深し」が「老ゆ」を修飾する用例は見いだしがたい。とすれば、「としふかく」全体が「おいぬる」を修飾するととるのが穏当であろう。

「老ゆ」には、「年ふればわがくろかみもしら河のみづはぐむまで老いにけるかな」（後撰集・十七・雑三・一二一九・檜垣嫗）、「年ふればこしのしら山おいにけりおほくの冬の雪つもりつつ」（拾遺集・四・冬・二四九・壬生忠見）などのように、「年経（ふ）」が使われている。また、「年深く」は、前掲の用例のように、雪・松など人以外に使用されるのが一般的であり、「深し」の連用形以外を検索しても同様である。「としふかき人のわかれの涙がは袖のしがらみ思ひこそやれ」（元輔集・一一〇）は「人」に係るが、老齢をいうのではなく、男女の付き合いの深さ・長さについていったものである。

おいぬる人の　「老いぬる人」という表現は、平安時代になってから、「としふればおいぬる人のしろかみを夏もきえせぬゆきかとぞ見る」（好忠集・毎月集・夏・一六九）、「花さかで老いぬる人のまがきには菊さへ時にあはぬなりけり」（清輔集・一七四）などが見られるが、用例は少ない。老人という意味では、「老いぬる人」より「おきな（翁）」という一語のほうが歌には用いられているが、嘆老の歌全体からすれば、老人そのものを歌に詠み込むことは少ない。本集には、七首が「老」を句題に含み（一二・四三・六二・六四・六七・七八・一〇五）、部立は春・秋・冬・風月・述懐のように、いくつかの部立に渡り、そのうち七八番歌以外が「老ゆ」を詠み込んであり、嘆老というテーマの歌が本集で一定の位置を占めているといえる。前項で「としふかく」が「おいぬる」を修飾しているとしたが、両者は言い換えではなく、老い方の程度を限定・強調する、つまり初期高齢者ではなく、後期高齢者であることを示している。また、「人」という語が和歌に用いられる場合は、「春きぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ」（古今集・一・春上・一一・壬生忠岑）のように一般の人を指したり、「心がへする物にもがかたこひはくるしき物と人にしらせむ」（古今集・十一・恋一・五四〇）のように特定の相手（特に恋の相

手）を指したりすることが多い。場面によっては、「女のをとこをいとひて、さすがにいかがおぼえけん、いへりける／ちはやぶる神にもあらぬわがなかの雲井遥に成りもゆくかな」（後撰集・十四・恋六・一〇二五）の返歌「千早振神にも何にたとふらんおのれくもゐに人をなしつつ」（一〇二六）のように詠み手自身を表わすこともある。ここでは、「なりけり」構文のあり方から、詠み手を含む人一般を指すとする（【補注】参照）。

かなしきは　初句と第二句を受けて、上句全体が主題であることを表わし、典型的な古今集的表現の「……は……なりけり」という構文を構成する。その中でも、「かなしきは……なりけり」という歌は、「おきのゐて身をやくよりもかなしきは宮こしまべのわかれなりけり」（古今集・十・物名・一一〇四・小野小町、墨滅歌）、「ゆくさきをしらぬ涙の悲しきはただめのまへにおつるなりけり」（後撰集・十九・一三三三・源逆）、「うつつにも夢にもあはでかなしきはうつつも夢もあかぬなりけり」（貫之集・六五七）などのように、類型的に見られる。ここでの「かなし」には、老いに関することであるから、愛惜の意は認められず、哀傷を表わしていよう。

さけるはなさへ　「咲ける花」という表現は、「ちどりゆるさほのかはべをとめくればみなそこきりてさけるはなかも」（寛平御時菊合・六）、「いろみんとうゑしもしるくやまぶきのおもふさまにもさけるはなかな」（好忠集・毎月集・春・七二）などのように、詠嘆の終助詞を下接して結句に置かれることが多く、特に、挙例の好忠歌以降は、ほとんどがそのように詠まれる。それらに対して、当歌は「咲ける花」の最初期の用例ではあるが、第四句に位置し、結句の主語となる。なお、「咲ける花」を素材として老いを詠嘆する歌は見出し得ない。「さくはな」ではなく「さけるはな」とするのは、すでに咲いていることを示す。

おとるなりけり　「おとる」という動詞は何かと比較してマイナスに評価することを表わす。「おとらざりけり」という、その否定形が結句の類型表現になることはあっても、当歌のように、肯定形でそのまま表現される用例は他に見出しがたい。景物を対象とした和歌はその優れた点を詠むのが原則であるから、当然のことだろう。本集でも「おとる」の用例は当歌のみである。当歌で「おとる」のは「さけるはな」であるが、①何と比べてか、②どういう点でか、ということが問題になる。①については、普通なら他の対象と比べてとなりそうであるが、「さへ」という副助詞があるので、他はさらに「おとる」のは自明であるから、考えにくい。とすれば、花を見る人のほうが、以前と比べてということになる。それが②の理由として、上句の老いることの悲しさにつながる。すなわち、目の老化によって、以前は美しく見えた花が鮮明には見えなくなった、そのことを「おとる」と表現したのである。なお、「なりけり」については【補注】参照。

【補注】

老人の悲しさとして、咲いている花までもが劣って見えることもその一つだったことを発見した驚きを詠む。美しいはずの花を「おとるなりけり」としたところが趣向であろう。背後には、老化による様々な衰えがあり、その中でも、美しい花までが劣って見えることから、その詠嘆がより深くなる。

【語釈】でも触れたように、嘆老を眼の老化から詠むのも珍しいし、各句も用例が少なかったり、用いられ方が特異だったりする。そのような全体を、「……は……なりけり」という類型的な構文に落し込むことによって、一首として体裁が担保されていると言えよう。

それにしても、当歌は春の部立に収められているのであって、嘆老そのものがテーマではそぐわない。当歌と春を結び付けるとしたら、花しかあるまい。それがとりわけ春の花であることに意味を見出すとしたら、春が、巡り来る一年の初めの季節だからであろう。劉希夷の「代悲白頭翁」詩を持ち出すまでもなく、自然の一つである花は毎春変わることなく咲くのに対して、人は年とともに老いて変わってゆくばかりである。千里が当歌を春歌として位置付けたのには、そういう対比意識があったからと推定される。

「なりけり」という文末表現は、真理や真実に気付いた詠嘆を表す。すなわち、単に詠み手の個人的体験だけではなく、それをも包摂した普遍的真理に気づき詠嘆したのである（糸井通浩「『なりけり』構文――平安朝和歌文体序説」、『古代文学言語の研究』和泉書院、二〇一八年、所収、参照）。当歌における、その普遍的真理とは、年寄りになれば誰もみな花は劣って見えるものなのであって、もはやそこから逃れることができない、ということであり、それに気づいた驚きである。これをふまえれば、【語釈】「おいぬる人」の項で述べたように、「人」は詠み手自身をも含んだ、人一般を表わす用法であると考えられる。

なお、件の糸井論文は本集に一四首の「なりけり」歌を認め、その使用率の高さを指摘しているが、本稿が底本とする流布本系統伝寂蓮筆本では、それよりも少なく、当歌も含めて九首である（一二・一三・四三・五九・七〇・八四・八八・一〇〇・一一一）。それでも全歌数の七・二％を占め、八代集の平均六％より割合は高い。また、本集の「……は……なりけり」は、全五例が

当歌と同じく、提題部は第三句末に活用語の連体形に係助詞「は」を下接し、「なりけり」はすべて歌末にある（一二・一三・四三・八四・八八）。それら以外にも、第三句末に係助詞「ぞ」があり、歌末を「なりけり」とする用例が二例ある（七〇・一〇〇）。本集の「なりけり」歌は、上句と下句とに切れる傾向が強いといえる。

なお、赤人集には、「としふかくおいぬるひとのかなしきはさけるはなをもたどるなりけり」（赤人集・二〇）の本文で載る。「おとる」が「たどる」に代わっているが、これも眼の老化によって、手探り状態であることを表わそうとしたのであろう。

【比較対照】

原拠詩は、次の、白氏文集の「無夢」（巻五十八・二八三二）と題する五言律詩であり、句題は首聯の第一句から採られる。原拠詩の律詩において、首聯から選ばれることはもっとも少ない。

老眼花前暗（老眼花前に暗く、）
春衣雨後寒（春衣雨後に寒し。）
旧詩多忘却（旧詩多くは忘却せり、）
新酒且嘗看（新酒且（しばら）く嘗めて看む。）
拙定於身穏（拙なれば定めて身に於いて穏やかならむ、）
慵応趁伴難（慵なれば応に伴を趁（お）ふこと難かるべし。）
漸銷名利想（漸く名利の想ひを銷し、）
無夢到長安（夢の長安に到る無し。）

そもそも全体的に季節感に乏しいこの詩から春の句題を選ぶとしたら、首聯しかあるまい。ただし、その二句のどちらにせよ、積極的に春の素材を取り上げたとは言いがたく、あくまでも老いた自身の状況を述べることに中心がある。

原拠詩は洛陽での老後の閑居を詠むものであり、たしかに首聯では老化による衰えを示してはいるが、そこに悲哀は認められず、それ以降との関係からは、その事実を事実として受け止める姿勢が感じられよう。

句題と和歌との関係を見ると、句題にある「眼・前・暗」のそれぞれにそのまま対応する表現が歌には用いられていない。「眼」については、「め」や「まなこ」を含め、王朝和歌では身体語彙を用いることが極力避けられたためであろう。「前」と「暗」については、その表わす状況を汲んだうえで、「さけるはなさへおとる」と言い換えたと考えられる。

逆に句題にはなくて、和歌で補われた表現に、「としふかし」と「かなし」がある。「としふかし」に関しては、【語釈】該項に示したように、「老」をより限定的に強調するためと見られるが、「かなし」は、当歌の主題を担う表現でもあり、句題さらに原拠詩から大きく隔たった補足になっている。この点において、当歌は句題の単なる直訳にはなりえないことはもとより、一般的な春歌からも逸脱している。このような当該の句題和歌に千里のねらいがあったとすれば、まさにこの逸脱の意外性にあったのではないだろうか。

【補注】でも確認したように、当歌は自然の不変あるいは再生に対する人間の不可逆的な変化を「かなし」と捉えてみせたものである。これは、当歌の句題の原拠詩を知っている者からすれば、当該詩句に対する、普通の解釈とは異なったものと受け取られたであろう。それ以上に、一見、嘆老を詠む当歌がなぜ春歌なのかという疑問を抱かせたのではあるまいか。

じつは、そこには前提として、春の花は賞美・堪能されるに価するという、いかにも春歌らしい見方がまずあって、それを最後の、あるいはせめてもの楽しみとしていたにもかかわらず、老いによって十分に叶えられなくなったから、「さけるはなさへ」の「さへ」なのであり、それゆえに「かなし」ということなのである。つまり、構文的にはあきらかに老いの悲しさを主題としてはいるが、「……は……なりけり」という古今的な類型表現の真骨頂が主題に対する解説部分の機知にあることを考えれば、上句よりも「さけるはなさへおとるなりけり」という下句にこそ、歌の主眼があったと言える。

13　花下忘帰因美景（花下、帰るを忘るるは美景に因る）
　　花をみてかへらむことのわするるは色こきはなによりてなりけり

【通釈】

花を見て帰ろうとすることを忘れるのは、色の濃い花のせいだったのだなあ。

【語釈】

花をみて　この句は万葉集にはない。三代集のころまでは、「相坂のせきのまにまに花を見て春のきにけるほどもしられず」（馬内侍・一〇一）、「むらさきのいろにいでけるはなをみて人はしのぶとつゆぞつけける」（実方集・一七一）などのように、第三句に置かれる用例が多い。初句に配されるのは和泉式部集あたりからで、当歌はそれにかなり先んじた用例である。「花をみて春は心もなぐさみき紅葉の折ぞ物はかなしき」（和泉式部集・二八三）、「花をみてのべに心をやりつれば宿にて千代の秋はへぬべし」（赤染衛門集・一四三）などのように、この句を初句に置いて、当歌と同様に花に魅了される心を詠むが、そのために帰るのを忘れるという用例はほとんどない。そうした中で、院政期の「はなをみてくるるそらをもしらぬにはいりあひのかねぞしるしなりける」（為忠家後度百首・山寺桜・一五四・藤原親隆）は、花を見て帰るのを忘れることに通じる内容とともに、「……は……なりけり」の構文でも共通している。

かへらむことの　助動詞「む」は、「こと」を修飾する連体形であり、その場合は仮定あるいは婉曲の用法とされるが、当歌ではどちらも適当とは言いがたい。なぜなら、仮定とすれば、結句の「なりけり」という既定表現に抵触するからであり、婉曲とすれば、歌意全体から考えて、その必然性がないからである。当歌における動詞（「みる」「かへる」「わする」）の主語は明示されていないが、一人称であることを妨げない。とすれば、この「む」は文末ではないものの、意志を表わすと見ることができる。帰ることを忘れるというのは、事実としては考えがたい。実際には、帰ろうとする気持ちにならないということである。「ちりかかる花のにしきはきたれどもかへらむことぞわすられにける」（千載集・二・春下・九〇・藤原実房）も同様である。句末の格助詞「の」は、すぐ後に続く「わする」との関係からは、「を」のほうが自然である。底本以外では、「かへらんことを」とする本文が多いのも、そのためであろう。ただ、「かの母君のあはれに言ひおきしことの忘れざりしかば」（源氏物語・藤袴）のように、関係的には対象を示すことになる用法も見られなくないのであって、当歌もそれに相当しよう。「かへらむこと」を含む句は、万葉集にはなく、古今集前後でも稀で、「春のひはくれやしぬらむはなをおきてかへらむことぞものうかりける」（躬恒集・二四〇）がある程度。

わするるは　この句も万葉集にない。用例は多くないが、初句または第三句に置かれる。特に、「ながむるにものおもふことのわするるは月はうき世のほかよりやゆく」（玄玄集・二六・大江為基）、「ちりぬべきはなみる春をわするるはもみぢをきたるさくにぞありける」（範永集・三〇）と、第三句にあって前の句を「忘る」の対象とし、主題として提示するのが類型となり、当歌はこの類型の早い用例となる。

色こきはなに　「花」について「色こし」という表現は見られるが、「色こきはな」という表現になると用例は稀で、奈良・平安時代には検索し得ない。「こき色かいつはたうすくうつろはむ花に心もつけざらんかも」（拾遺集・七・物名・三五九）と、濃い色が薄くなる前に賞美しようと詠み、「かにひの花につけて／花のいろのこきをみすとてこきたるをおろかに人はおもふらんやぞ」（伊勢集・四六五）と、「かにひ」（未詳）の花を贈るのに、わざわざ「花のいろのこきを」見せようとするのに、相手は私をなおざりな気持と思っているのかと詠むように、一般に花は色が濃いことが良いとされた。

よりてなりけり　動詞「因る」に接続助詞「て」が下接し、さらに助動詞の複合「なりけり」が下接した句である。この句は稀で、平安時代には「夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてなりけり」（古今集・十一・恋一・五四四）があるくらいである。「なりけり」を用いて原因・理由に気付いたことを明示するには、「已然形＋ば＋なりけり」が多く使われた。「君こふとぬれにし袖のかわかぬは思ひの外にあればなりけり」（後撰集・九・恋一・五六二）、「みな人のいのちをつゆにたとふるは草むらごとにおけばなりけり」（拾遺集・二十・哀傷・一三二五・佐清）など。

【補注】

十二番歌同様、当歌も古今集的表現の典型的構文である「……は……なりけり」でまとめた歌であるが、発見の対象が理由であることを、「よりて」を用いて明確に示す点が異色である。

花のせいで帰らないという歌は、「をりとらばをしげにもあるか桜花いざやどかりてちるまでは見む」（古今集・一・春上・六五）、「このさとにたびねしぬべしさくら花ちりのまがひにいへぢわすれて」（古今集・二・春下・七二）などのように、類型となっている。

ただ、「かへらむ(ん)」で検索し、「花」を見て帰らないことを詠む歌を吟味すると、その理由として当歌の「色こきはな」のような、花の美しさを個別的または具体的に形容する用例を見出しがたい。「ちりはててのちやかへらんふるさともわすられぬべき山さくらかな」（後拾遺集・二・

春上・一二五・源退済）のように、花が美しいことが前提としてあって、ことさら花がどのように美しいか詠まれることは、一般にはないのである。前掲の「ちりかかる花のにしきはきたれどもかへらむことぞわすられにける」（千載集・二・春下・九〇・藤原実房）は、「花のにしき」として花の美しさを表すが、これも、花は美しいという一般観念をもとにした比喩であり、個別的な花の美しさを具体的に表現するものではない。「かへらむ」「花」の語は含まないが、挙例の古今集六五番歌もそうである。七二番歌は散り紛う桜のせいで道がわからなくなるというのは表向きの理由で、散る花が惜しいからであり、その前提として花の美しさがある。このように、帰るのを忘れる理由に個別的な花の美しさをあげるのは、一般的ではない。

当歌における「はな」そのものも、どの花か特定されず、逆にそれゆえに桜あるいは梅とも断じがたい。このことは「色こきはな」という措辞に関わる。桜も梅もその花の色が白とするならば、その濃さが問われることはありえないからである。かといって、紅梅に特定されるほどの情報も見出せない。【語釈】「色こきはなに」の項に述べたように、「一般に花は色が濃いことが良いとされた」とするならば、当歌では、その一般性に基づいた表現にしたということであろう。あるいは、【比較対照】に述べるように、原拠詩にある「杏」（中国原産で、当時はまだ日本に輸入されていなかった）の花の色を想定したのかもしれない。

なお、赤人集に「はるをみてかへらんことのわすらるるはこだかきかげによりてなりけり」（八）の本文で載る。「はな」が「はる」に、「色こきはな」が「こだかきかげ」に代わっていて、より歌意がとりづらい。

【比較対照】

原拠詩は、次の、白氏文集の「酬哥舒大見贈」（巻十三・六一六）と題する七言律詩であり、句題は頷聯の第一句から採られる。千載佳句（春宴・六九五）、和漢朗詠集（春興・一八）にも採られる。本集で春の部立に収められるのも、原拠詩の季節と一致しているからである。

去歳歓遊何處去（去歳の歓遊、何處（いづく）にか去（ゆ）く、）
曲江西岸杏園東（曲江の西岸、杏園の東。）
花下忘帰因美景（花下、帰るを忘るるは美景に因り、）
樽前勧酒是春風（樽前（そんぜん）酒を勧むるは是れ春風なり。）
各従微官風塵裏（各微官に従ふ、風塵の裏（うち）、）
共度流年離別中（共に流年を度る、離別の中（うち）。）
今日相逢愁又喜（今日相逢ひ、愁へて又た喜ぶ、）
八人分散両人同（八人分散し、両人は同じ。）

底本では、句題を「花下忘帰因華景」とするが、同様の本文は高松宮旧蔵本のみで、他本と原拠詩に従って「美景」と改めた。ただし、初句と第四句で「花」を繰り返し用いていることを考慮すれば、千里が参照した本文は「花景」だった可能性もないではない。

当歌は、「かへらむことの」が「帰」、「わするるは」が「忘」、「よりて」が「因」に相当し、一首の「……かへらむことのわするるは」を主題として、その理由を説述するという骨組みは、原拠詩に依拠する。とすれば、作者の工夫は、「花下」という詠み手の位置を、「花をみて」と動作に置き換えた点、「美景」という景色を「色こきはな」と花の様態に限定した点、一首を「なりけり」で統括した点にあると言える。

当歌の初句と第四句で「はな」という語が重複する点、一般的には傷とみなされる。初句はともかく、第四句でなぜ「美景」を花に限定したのかということが問題になり、この点において当歌が句題から離れるところでもある。考えられるのは、次の二点である。一つは、当時の和歌にあっては、「美景」に対応するような、もろもろの自然物を含む景観全体を観賞の対象とすることがなかったということである。もう一つは、「花下」を「はなをみて」に置き換えてしまった段階で、花に焦点化せざるをえなかったということである。

この句題、特に「花下忘帰」の部分は好まれ、「花下忘帰」といふ心をよめる／とふ人もやどにはあらじ山桜ちらでかへりしはるしなければ」（後拾遺集・一・春上・一二三・良暹法師）、「斎院にて花下忘帰といへる事を／あづまちのおいそのもりの花ならばかへらむことを忘れましやは」（散木奇歌集・八二）、「花下忘帰因美景／春の山に霞の袖をかたしきていくかに成りぬ花の下ぶし」（拾玉集・一九一五）などのように、平安時代後半からよく詠まれた。当歌はその嚆

矢であり、以後の例は本集の句題をふまえたものと推測される。挙例と比べると、当歌の句題に即する程度が相対的に高いのは、まだ句題和歌という設定に忠実な、まさに嚆矢の段階であったことによると考えられる。

An Investigation and interpretation of ‘*Oeno Chisato-shu*’

（大江千里集）(4)

KOIKE Hiroaki[*1] and HANZAWA Kan’ichi[*2]

This paper is an investigation and interpretation (釈論) of ‘Oe no Chisato-shu’ (大江千里集) which is an anthology of Waka (和歌＝ancient Japanese poems) by Oe himself.

In this anthology, as usually called Kudai-waka (句題和歌), each Waka is given one phrase poetic title from Kanshi (漢詩＝ancient Chinese poem) selected by Oe.

The authors of this paper think that the mutual relations between expressions in both Waka and Kanshi have various patterns. So, the central purpose of our investigation is to concretely explicate the actual condition of all these patterns. And first,this paper treats of Waka No.11～No.13 of ‘Oe no Chisato-shu’.

キーワード：大江千里，句題，白氏文集，表現

[*1] 一般科教授。本研究には、小池について交付されたＪＳＰＳ科研費 16K02390（基盤研究 C）、平成二十九年度長野工業高等専門学校特別経費(申請研究費)による研究成果が反映されている。

[*2] 共立女子大学文芸学部教授